

東郷村報

第70号

昭和32年9月10日

発行所

宮崎県東臼杵郡

東郷村役場

日向市富高

安藤印刷所

電話 64番

号 念 記 祭 水 牧



若山牧水先生

牧水祭を迎えて

黒木松美

九月十七日は牧水先生の御命日に当たりますので、この日をトシまして本年も牧水祭を行います。先生は御偉業を讃えることといたしました。

先生は明治十八年八月二十四日坪谷に御誕生になり、昭和三年九月十七日沼津の千本松原の蔭の家で逝かれましたが、この四十四年の生涯は清貧に安んぜられてただ一途に歌道に精進され、幾多の名歌を残されたのみならず、短歌界に一新機軸を画されまして、牧水の名はわが文学史上に不朽に刻されたのであります。

わが村、東郷村の名はこの偉大な歌人を生んだことによつて永遠に日本文化の聖地として頌称されるべきであります。

われわれ村民は牧水先生と郷土を同じくして深い親近感を持つが故に割合、先生がわが短歌界に残された大きな足跡に対して敬仰の念が薄く責務の感も乏しいのではないかと思われ、私には年一度のこの牧水祭の日だけでも先生の偉業を敬仰し

白玉の
歯にしみとほる
秋の夜の
酒はしづかに
飲むべかり
けり

牧水先生初期の作品

明治三十三年作品

桜

春の夜の月もかすみて桜
かな
故郷の山もかすみて今朝
の春

春の山越

(おのれ去年の春季休業中
都農なる縁りの家に遊び
居たりしが、にはかに用
の起りて七曲りと云ふ山
を越えて古里へ帰りし事
ありき。今其折の日記を
題名をつけて左に掲げ
る。)

日の出

七曲りと云ふ山を越えむ
とて黎明都農の町を立ち出
づ。十町ばかり登りける頃
はやつたればとて草の上
に座して何処ともなく打ち
見やりぬ。薄霧立ち渡りて

牧水祭

一、期日 九月十七日
二、場所 歌碑前(坪谷)
坪谷中学校

行事

- (一) 学童音楽会 前九時～十時三十分
- (二) 歌碑祭 前十一時～十二時
- (三) 講演会 后一時～二時三十分
- (四) 短歌会 后二時三十分～三時
- (五) 祝賀会 后三時～后四時
- (六) 遺墨遺品展 学童作品展 前九時～后四時

ふるさとの
尾鈴の山の
かなしさよ
秋もかすみの
たなびきて居り

明治三十四年作品

滝

道は峻しけれど春の山路
の面白きに足の痛みも覚
えぬ。内河やらんかす
かなる物音こそ聞えけれ
仲国のそれならねど峰の嵐
か木を轟る人の斧の音か、
と怪しう思ひ連れる男に
問へば滝の音あるなりと答
ふ。足と聞きは益々々々
を隔てたる急がせ行く程に
一条の布を懸けたる如き小
滝のありたれば、之ならん
とてよき滝なりとわれの声
すれば男は頭をふりて、否
とよあれは今申せし滝に
候はず、今少し歩ませ給
へば、此滝の二三倍ばかりな
る滝の候と云うに、驚きて
此滝だに多く見難きに此上
もすぐれたるは如何あらん
とて急ぎ行くまに、音は
堂々高くなり行き遂に達し
ぬ。実に男の言ひし如く前
には数倍せる滝なりけり。
巖石峨々と聳えたるが
上に桜つゝ、生ひ繁るが
て其間に水の逆まき落つる
なり。其落つるや凡てにて
二十丈もあらんか、始め二
三丈は一条にて落ちつゝ、
ながながと落ちて七丈
つる事十丈ばかりにして又

明治三十五年作品

都の友へ

花も臘の月影に重き袂の
梅の移り香うちはらひつゝ、
筆をとり申候
柳桜をこきませし都の春
さぞかし花やかに候はむ
よき程にうかれ給へ、かま
へて深入りなしたまひそ。
寂しなから山里も今は春に
候。梅はま盛り、やがては
桜もほころびぬべし。君と
袂を別しし村ははれの柳の
はや若芽たちて風になびく
を見てわれ知らぬ思にうた
れ候。かの折君の吟じ給ひ
し詩は、よも忘れたまは
りし事よ、御家族みなく
いと健かに渡らせ候

明治三十六年作品

水鳥

春の水に白粉はけしうらみ
春の水紅絹ハンカチに金魚
逐ふ

新春賦

新年来る、新年来る。
陸にわかれ暴風にもまれ
浪にたぐよふこゝに幾月
たゞひたすらに死を待つ
身に纏ふ綾や錦はちりひち
や蓮の葉の上の露も玉かな
(著者をいさむ)

明治三十七年作品

なつ草

このさる夏やすみの帰省
日記のはし／＼にかきつ
け置きたるよりとりいで
しなり。
色も香もなきた／＼なつ草
のしげみとこそ。

草かり

虎公と文公は得意の鼻唄
でせつせと刈つて居る。あ
はれや野の花、かくては無
情の訴へ所もあるまじ。一
抹の日光東天に印して星の
名残りの閃きかすかに、夜
の神や、に西へ車をさし
し給ふては標の梢に風起き
出でて白露団々草の薫りの
ひたぶるに身にせまる。
やがては天の八重雲いづ
の干別にきて、とうとう太
陽は東の山に出御しまし
た。若い光に照らされた野
や森や、言ふに言はれぬ奥
床しい彩を帯んで山鳩の眼
い調子がひとり此静かな曙
にたゞよふて居る。谷間の
濃き霧は旭の光を受けて若
紫にたなびき風を受けてか
徐々に谷より溢れ出でて、
峰の松野の草、悉くうす墨
絵の中に包まうと企て、追

ゆく雲

ああ、友ではあるまいか
ああ、雲よ沈みゆく
日の入るかたのたらちねの
住みます国の西へ行って
わが思ひをばつたへ行け
よしや東へ風吹くも
なびいて母を悩ませそ
そぞろに曇る眼をあげて
倚りし樵の木枝遠く
吹くともななき秋かせに
いさよう雲をながむれば
涙のやほはら／＼に
草に伏れてうち咽ぶかな

再び一条となりて落つるな
り。滝の中程に此方よりつ
き出でし巖石あり、其岩頭
に重し樹木の中に二本
桜の難ひらたるとして飛沫と
共に舞ふ。あれは那智、養
老、布引など世に滝は多
し、然れ共或は一条或は七
条となりて日本武士の心と
云へる山桜花と共に舞ひ下
る滝は蓋しつたあらざるべ
しなど思ひつづけ居たる中
無情にも例の男に引きたれ
られて去りぬ。

四方の山々有るか無きかに
ほの見えて薄墨絵の如し。
日は未だ出でず遙かなる海
原のはては黄ばみたる雲の
山の様なが漸々紅うなり
行きて其間に一つの紅点の
現はれしが見る／＼大きく
なりて全身を海上に表して
波に光を漂はしぬ。濃く淡
く朝霧にとざされし美々津
辺りの松原よりは日の出に
驚きてにや、漕ぎ出づる真
帆片帆様々なる間を鷗の二
つ三つ飛びちがひたる、こ
よなき眺めならずや。

再び一条となりて落つるな
り。滝の中程に此方よりつ
き出でし巖石あり、其岩頭
に重し樹木の中に二本
桜の難ひらたるとして飛沫と
共に舞ふ。あれは那智、養
老、布引など世に滝は多
し、然れ共或は一条或は七
条となりて日本武士の心と
云へる山桜花と共に舞ひ下
る滝は蓋しつたあらざるべ
しなど思ひつづけ居たる中
無情にも例の男に引きたれ
られて去りぬ。

刻み終つて面を上げた。
鈴木高の三文字、わが竹馬
の友鈴木高のみ名、いつの
秋か此石上に淋しうわが手
によつて刻まると思つてい
たであらう。去年の秋まで
は此石の上に斯う兩人並ん
で盛んに未来を説いた。あ
の時の姿、あの時の物語、
今日もつゞに見える様で
あるのに君は行く水、吾は
残る石、あ、彼はもう此世
に居らぬのである。此千鳥
が淵の底、水死し石眠る此
崖下濃霧の深底、遂に終に
彼が墓であつたのか！
もう暮れるらしい。や、
にせまる霧の色深く、谷ま
す／＼悠に山ます／＼寂に
身にせまる鬼気耐へがたき
ほど寒く、やを立ち上つ
て静かに石を顧みた。今日
おのづからなる恋しさに
おのづから家を立ちいでて
秋草しげき野の丘の
榛の木がくわ路とめて
夕晴れし日を登るかな

柱古りたる古縁は
ほのかに菊の香をかよふ
うつつなき身を投げ伏して
廂はるかにながむれば
ゆくら／＼にゆく雲の
遠くおもひをさそうかな
見よ、秋の日の青空の
いや澄む西の丘の上の
樵の枯木の枝つたひ
松にかくるるさま見れば
天の通ひ路いや高く
雲は東にいさよへり
ああけふの日ぞふるさとの
母は深山をわけなやみ
いたなき高き樹にすがり
老いの御袖をふりかざし
風に散りゆく葉のなかに
いまわが方を見よなはす
日向の山の秋ふかみ
古樹巨樹の枯木立
寂びたるなを漏るる日は
白雲なせる髪引いて
わが子恋ひつゞさまよへる
老い人いかに照らすらむ
思へば恋ひしならちめや
思へばかなしならちめや
老いの御こころ苦しめて
遠くあそべる手はここに
こころなげにもふるまひて
安けきゆめぞむさばれる
みづから責むるくるしさに
おのづからなる恋しさに
おのづから家を立ちいでて
秋草しげき野の丘の
榛の木がくわ路とめて
夕晴れし日を登るかな

若草や桃咲く路は闇ぞよき
君が小窓の灯の漏れてくる
ほととぎす啼くよと母に起
されてすが小窓の草月夜
かな

父といね母と起きいづるふ
とぎすかな
夕霧はしづかに降り来ふる
さとの別れの酒の冷たき窓
に

ゆく雲にさそはれぬべきお
もひして秋照る岡に立ちに
けるかな

白菊やみやこにちかき里住
みの男ばかりの家にみだれ
ぬ

春の日は孔雀に照りて人に
照りて彩羽あや袖鏡に入る
も

明治三十九年作品

秋の灯や壁にかかれる古帽
子袴のさまも身にしむ夜な
り

机のうえ植木の鉢の黒つち
に萌え出る芽あり秋の夜の
灯よ

水の音に似て啼く鳥よ山さ
くら松にまじれる深山の屋
を

遠海ののの鳴るごときおも
ひかな春の灯かけに人恋ふ
る夜は

初夏の富士こそ見ゆれ朝雲
のひくく流るる相模の西に
わがなげき音にたつごとき
おもひして夜雨聴くかなゆ
く春の家

地のひびき雲にかよはむ初
夏のみどりゆるがぬ落日の
国

おもひでは風にながるるほ
たる火の青う消えてはまた
もゆるごと

初秋や夕日の海の白鳥の啼
くかなしき磯の家のかな
柿紅葉桜紅葉のなかに住む
山家の子なり瞳の涼しさよ
かへり咲く山の桜になにご
とのおもひでなきかやよ旅
人よ

うらら日の秋の海こそおも
はゆれ君が御髪の白菊の花
秋の日やあ山は鳴る寂寞
のこの世に人のいつ生れた
る

明治四十年作品

雪
はるかなる遠世ならではま
た逢はむよしなきさまのそ
のうしろ影

水いろの春の天ゆくす需
と胸をなぐるわが悲しみ
と

仰ぎいていつしか君は眼を
とちぬうぐひす色のゆく春
の雲

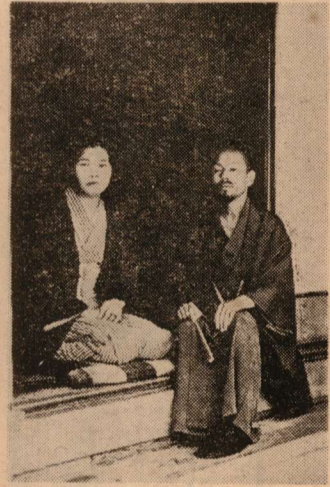
幾はしら神のみまじしこの
森の海見ましむいにしへの
日よ

牧水先生の生涯

若山牧水先生は本名を繁
としい、明治十八年八月二
十四日の朝坪谷に生れた。
父は立蔵、母はマキ、三人
の姉があつて牧水先生は長
男といはれる。一番末子
であつた。家は祖父の代か
ら医者であり、その祖父若
山健海は埼玉所沢町在の
農家に生れた少年時代から江
戸に出て勉学し、後に長崎
で西洋医学を学び、天保年
間にこの坪谷に移り住んだ
ものだが嘉永二年に蘭人が
始めて現在の種痘法を伝え
た時いち早くそれを学んで
わが国で最も早く種痘普及
に尽力した先覚者の一人だ
である。

牧水先生が四才の時、明
治二十二年に一家をあけて
隣村西郷村の小川に転住し
た。

明治二十五年四月先生は
田代尋常小学校に入学した
が通学が遠いので義兄に当
る今西吉郎氏が校長の羽坂
尋常小学校に転校し今西氏
宅に寄偶しがその秋、一家
と共に坪谷に帰り坪谷尋常



牧水先生と喜志子夫人

小学校に通学した。
明治二十九年三月坪谷小
学校を卒業し五月、父母の
膝下を離れて延岡に出て高
等小学校に入り、第三学年
修業の春、延岡中学校が設
立されると共にその第一回
生として入学した。このこ
ろからよく小説を読み文学
に対するあこがれをもつよ
うになつた。

中学三年の頃から牧水は
さかんに文学の本をよむと
同時に雑誌に文章や歌を投
稿しはじめた。

明治三十五年十七才の二
月には友人たちと贈答会を起
し「曙」という回覧文芸雜
誌を発行しはじめた。

牧水は歌を作りはじめた
頃は桂露、雨山、野百合等
の号を次々に用いていたが
明治三十七年の一月頃から
牧水と改めた。母親のマキ
と水との頃最も愛してい
たもの二つをとつたのであ
る。

家業が医者なので両親は
牧水を医者にするつもりで
あつたが牧水は文学を志望
した。

するようになり明治三十七
年春、延岡中学を卒業する
と共に上京して早稲田大学
文学部高等科に入學した。
そして上京後にもなく
「新春」歌壇選者の尾上葉
舟を訪れたが、この訪問に
よつて牧水ははつきり葉舟
と結ばれることになつたの
である。

明治三十八年九月からは
英文科本科生となつた。そ
して翌三十九年の春あたり
から同級生六名と共に北斗
会を結んで毎週一回集まつ
て小説の研究をやり、やが
て回覧雑誌「北斗」を出し
た。

明治四十年に入つてその
歌は大きな進歩を示した
。「幾山河」「白鳥は」そ
の他牧水の代表作として今
おひろく愛誦されつゝある
作品はこのころの作であ
る。

明治四十一年七月、牧水
は早稲田大学英文科を卒業
した。そしてその月に「海
の声」を發行した。文学志
望の牧水に思ひつゝ就職口
はなく「海の声」の発行は
かんばしくなく、加うるに
前年あたりからの恋愛の方
も甚だ面白く行かず卒業後
の牧水の生活はかなりみじ
めなものであつた。

大正八年九月、散文集
「比較と熊野」を出版した
大正九年八月久し間の念
願であつた田園生活に
ために静岡岡原津に移つて
からの生活もかなり苦しか
つたが選歌を受持つ新聞雜
誌の数が次第に多くなると
共に収入も次第に増して生
活もいくらか楽になつて来
つゝあつた。

大正十一年十二月「短歌
作法」を翌十二年に歌集
「山桜の歌」を出版した。
大正十三年、亡父十三回
忌法要のため三月二十七日
坪谷に帰り四月十六日坪谷
をたつた。今坪谷神社に蔵
してある。

「うぶすなのわが氏神よと
お前もいよいよ切れるか
はすこの神」

の歌はこの帰省の際に奉納
したのである。
また裏面に「矢野寅吉お
ぢやんに贈る歌 おとなり
のしげ坊」と記した
。「おとなりの寅おぢやんに
物申す永く永く生きてお
酒飲ませようよ」
という愉快な短冊などの揮
毫もこのときの作である。
五月に童謡集「小さな
鶯」を七月に「みなかみ記
行」を出版した。
住宅兼雑誌發行所の建築
を計画し、資金を作るため
に短冊色紙半折の揮毫頒布
会を計画し、九月より全国
各地に催した。
大正十四年二月、隨筆集
「樹木とその葉」を出版し
た。この年の十月、沼津の
新築の家に移つた。
昭和二年五月上旬より朝

鮮各地に揮毫脚をなし、
その帰途七月中旬延岡にて
揮毫頒布会を催し、二十五
日に坪谷に帰り二十九日に
立つた。
昭和三年九月初めより臥
床、同月十七日日本松原の
蔭の家に永眠した。病名は
急性腸胃炎兼肝臓硬変症で
行年四十三才。
沼津市浜道乗運寺内の墓
地に葬られた。
法名、
古松院仙普牧水居士

暮坂峠での作品

枯野の旅

乾きたる
落葉のなかに栗の実を
湿りたる
朽葉がしたにちのちの実を
とりどりに
拾ふともなく拾ひもちて
今日の山路を越えて来ぬ
長かりしけふの山路
楽しかりしけふの山路
残りたる紅葉は照りて
餌餞うる鷹もぞ啼きし
上野の草津の湯より
沢渡の湯に越ゆる路
名も寂し暮坂峠

朝ごとと
つまみとりて
いただきつ
ひとつづつ食ふ
くれないの
酸ばき梅干
これ食へば
水にあらず
濃き霧に巻かれずといふ
朝ごとと
ひとつづつ
ひとつ梅干
草靴よ
お前もいよいよ切れるか
はすこの神

昨日
これで三日履いて来た
履上手の私と
出来のいいお前と
二人して越えて来た
山川のあとをしのぶに
捨てられぬおもひもぞする
なつかしきこれの草鞋よ

枯草に腰をおろして
取り出す参謀本部
五分の一の地図
見るかぎり続く枯野に
ところどころ立てる枯木の
立枯の楯の木は見ゆ
路は一つ
間違へる事は無き善
磁石さへよき方をさす
地図をたまたみ煙草とり出で
元氣よくマッチ擦ると
大きな欠伸をばしつ
頼み来し
その酒なしと
この宿の主人言うなる
破れたる紙幣とりいで
お頼み申す隣村まで
一走り行て買ひ来てよ
その酒の来る待ちがてに
いまいぢど入るよ温泉に
壁もなきさきさらしの湯に

ひとり言

井戸端会議の不平や、
いつの間にか狡猾な習慣の
老婆から押売せられていた
趣味や興味や、若しくは不
良少年式の小手先の巧み
や、それらは殆んど作者自
身眞実自分に關係のあるこ
とか無いことか危ぶむ程
度のもので多いのだ。其処
に何のひかりがあらうぞ。
ありとすればそれは僅にガラ
ス玉のひかりである。
自己全体を自然の前に神
の前に投げ出して初めて其
処に純真無垢の自然の光が
宿る。謂はゞ、その光の発
する時、われみづからが神
であり、自然の表象である
のだ。
その光をすなはちわれら
はわれらが歌に点す。

われみづからの小さき智慧
にたよるな
おのれを空しうしてたゞ神
の前に立て

おのれだにきよからば路傍
の草にも神を見む
おのれだにきよければ隨所
に輝く歌を見る

友よ、歌をうたはむ
わが生のあかしのために
いのりのために。

後記

編集

◇牧水先生が我が文学史上
に偉大なる業績を残され
ていることは今更申すま
でもないことであるが、
この偉大なる牧水先生と
郷土を同じうするわれわ
れ東郷村民は大いなるほ
こりを持つとともに責任
を痛感するのである。

◇先生が幼き日ははぐくん
でくれた坪谷の山川と生
家、これはいつまでも残
さねばならぬ文化財であ
る。

木曾の山奥、馬籠(まご
め)の寒村に島崎藤村ゆ
かりの家が村人達の積極
的なはたらきかけにより
「藤村記念館」として堂
々と保存されているよう
にわれ等も牧水先生家の保
存に万全を期したいもの
である。

◇牧水先生の歌碑は、北は
北海道から南は九州に至
る全国に十五カ所に建設
されているが、近く若き
日の母校恒富高校に「う
す紅に葉はいちはやくも
えいで、……歌碑が建て
られ、また暮坂峠には詩
碑が建てられる。歌人、
詩人で先生程に歌碑や詩
碑のたてられて、これを
みても牧水先生がいかに
全国民から親しまれてい
る歌人であるかがうかが
われる。

◇こゝに牧水祭を迎え、村
民こそつてこれに参列し
て先生の偉業を讃えるこ
とにしよう。

短歌募集

牧水祭の行事として左記により短歌
を募集いたします。ふるつて御投稿
下さい

一、募集締切 九月十三日

二、一人 五首以内

三、送 先 東郷村役場内
牧水顕彰会宛

四、入選歌には記念品を呈する

五、投稿者は住所、氏名を明記のこと

若草や桃咲く路は闇ぞよき
君が小窓の灯の漏れてくる
ほととぎす啼くよと母に起
されてすが小窓の草月夜
かな

父といね母と起きいづるふ
とぎすかな
夕霧はしづかに降り来ふる
さとの別れの酒の冷たき窓
に

ゆく雲にさそはれぬべきお
もひして秋照る岡に立ちに
けるかな

白菊やみやこにちかき里住
みの男ばかりの家にみだれ
ぬ

春の日は孔雀に照りて人に
照りて彩羽あや袖鏡に入る
も